

令和6年度 学校評価表

品川区立八潮学園

校長 夏井 真一

八潮学園校区教育協働委員会

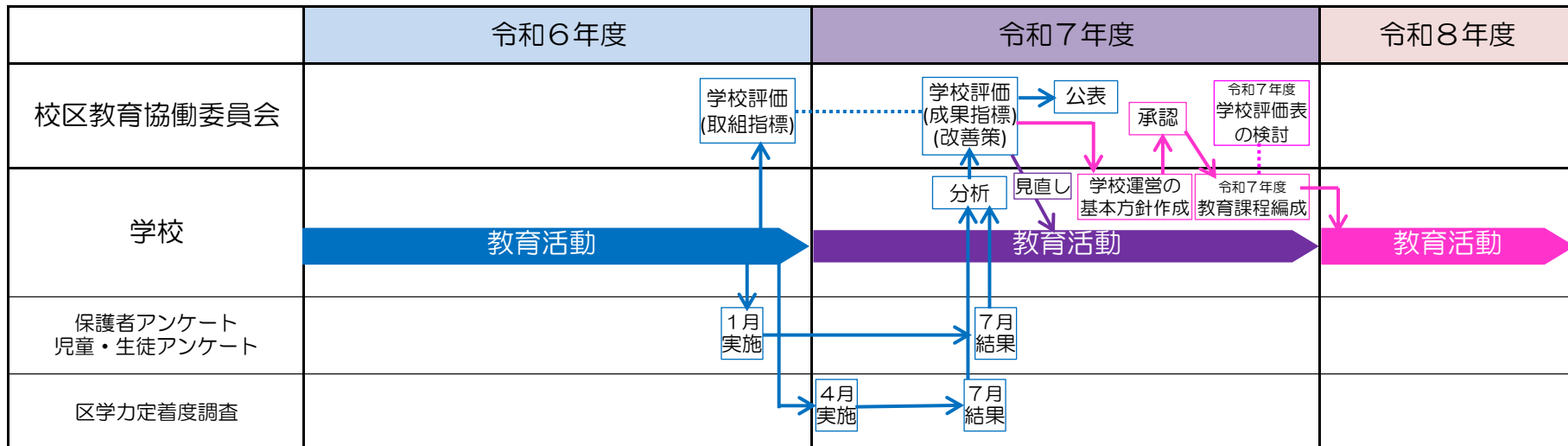
委員長 鞍馬 裕美

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和6年度の学校評価が令和7年度および令和8年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和6年度 学校評価 品川区立八潮学園

評価項目1 学力に関すること

重点目標		<ul style="list-style-type: none"> ・ICTを効果的に利活用し、各教科の目標に迫るために授業改善を行う。 ・授業規律を確立し、1～4年では1コマ45分の学級担任制、5～9年では1コマ50分の教科担任制の特性を生かし、基礎基本の定着を図る。 ・児童生徒の実情に応じて、習熟度別少人数指導など様々な学習形態を生かした授業を行う。 ・品川コミュニティ・スクールとして、地域人材を活用した授業を推進して意欲を高めるとともに、地域未来塾を活用し、学習の支援が必要な児童生徒について適切な支援を行う。 		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	品川区学力定着度調査において、全学年、全教科において、ポジティブな経年変化にする。	前期課程では、理科・社会の科目が昨年度の結果を上回っており、後期課程では、国語の結果が昨年度を上回った。基礎学力の定着に向け、間違いが多い問題などを授業内で復習する時間を設けていく計画をしている。	B	教育計画にある「生活のこころ」を全教職員が共通理解して実践していく。多くの児童生徒にとっては、良い効果を上げている。一部、学習規律の確立が困難な児童・生徒もおり、一人の教員だけで把握、統率することが難しいケースがある。IT・ケージアシタ、さぼーと品川などの学習支援員、介助員などの力も借りつつ、保護者への協力も要請している。 指導方法に関する教職員向けの児童生徒の興味・関心が高まるような研修も実施していく。
	授業規律についての児童生徒の心得をHP上で周知徹底し、学期ごとに学級集団の状況を振り返り、二者、三者面談で家庭とも連携して振り返りを行う。	日頃から、基本的な学習規律の定着に向けて、継続的に指導を行っている。特に、毎日の提出物や忘れ物については、その都度指導を行っている。また、保護者面談、学年だよりなどを通して、保護者への協力を呼びかけている。	B	
	児童生徒が学びの文脈を捉え、学習に意欲的に取り組めるように、各教科や市民科学学習での学びの成果を発表する場、活用する場を設定する。	どの授業においても、児童生徒の学ぶ環境づくりを第一の目標として授業運営を行っている。また、日頃の授業のみならず学習成果発表会などの学校行事においても、その学びの成果を発表する場を設定している。	B	
②	児童生徒が自ら学びを深め、メディアセンターの月間平均貸出冊数を、前期4冊、後期0.5冊を上回る。	メディアセンターにおける貸出冊数は、前期が2.85冊、後期が0.3冊と目標値には満たなかった。	B	国語科の授業や委員会活動などを通して、読書の大切さを伝え、読書の機会を増やす。 1人1台端末を積極的かつ効果的に活用し、児童生徒の興味・関心を引き出すため、各学年で指導法や教材を共有していく。さらに、DX推進委員会を中心に効果的な活用法の研修をしていく。 区学力定着度調査、全国学力学習状況調査の結果を踏まえ、各教科とも年間の学習指導計画を見直し、学習指導内容の精選を行っていく。
	1人1台端末を利活用して「答えさがし」から「答えづくり」の授業改善を進める、令和5・6年度の、品川区研究学校の発表に向け、現改善を図る。	1人1台端末を活用した授業改善の在り方についての令和5、6年度の品川区研究発表はその状況を十分に伝える有効な発表会であった。	B	
	区学力定着度調査、全国学力・学習状況調査の分析を行い、児童生徒にフィードバックし、授業改善を図っている。	区学力定着度調査、全国学力学習状況調査の結果を踏まえ、学年会で実態を共有した。児童生徒の実態を意識した学習指導を計画・実施している。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒同士や教職員同士、教職員と児童生徒がより良い人間関係の中で学校生活を展開できるように、様々な活動を通して互いに学び合える態度を育成する。 ・学校行事を計画的に実施し、協力する体制を作り、ブロックごとの節目を生かして指導の重点化を図る。 ・市民科学習では、児童生徒がより良い社会の一員となるための道筋を示し、豊かな教養と人間性を育てる学習を展開する。 		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	区保護者アンケート「現在通っている学校に満足している」について、肯定的な評価(4段階の最上位)の割合を50%以上とする。	区保護者アンケート結果では、「当てはまる」と「どちらか」というと当てはまる」を合わせると本項目の肯定的評価は、78.1%であり、当初の指標は達成することができた。	B	市民科の学習を中心として、児童生徒一人一人が「自らの生き方」を見つけより良い人生を過ごすための指針を見つけ出すこと、また、挨拶、返事、学校や社会のルールを守るなどの規範意識の育成を目標として、日々の教育実践を行っている。 保護者の学校に対する満足度をあげるために、アンケートのそれぞれの項目を細かく精査して、課題を整理して改善策を考えていく。
	市民科学習のねらいの達成状況や課題について、市民科授業地区公開講座、学園だより、学年だより、キャリアパスポート等を通して、家庭や地域と共有する。	1年から9年までの各学年の市民科学習の状況においては、カリキュラム部を中心に指導計画、実施状況を把握している。また、市民科授業地区公開講座やキャリアパスポートをとおして、家庭や地域と内容を共有している。	A	
	教職員、児童生徒が、来訪者に継続して自らあいさつする風土を醸成するため、教職員、児童生徒会等でキャンペーンに取り組んでいる。	あいさつキャンペーンなどを通して、児童生徒があいさつをすることの大切さを感じる。定着までは、至らない児童生徒もまだいるため、長期的かつ具体的に取り組むことを考え実践していく必要があると考える。	B	
②	区保護者アンケート「コミュニティスクールの取組は良い」と肯定的評価(4段階の上位2項目の合計)の割合を、90%とする。	区保護者アンケート結果では、本項目の肯定的評価は、90.2%であり、当初の指標を達成することができた。	A	コミュニティスクールを中心として、地域と学校をつなぐ取組を行っている。 八潮まつり、夏休みラジオ体操などPTA、地域とも連携を密にすることができた。 また、「品川コミュニティスクールDAY」においては、防災、交通安全、学校生活について校区教育協働委員の方々も熟議をすることができた。八潮地区の実情をよく把握して、コミュニティスクールの機能を十分に生かして、次年度へつなげていきたい。
	連合自治会、青少年対策など、地域の行事への参加を促すため、広報・啓発活動を工夫している。	PTA活動の一つとして、青少年対策八潮地区委員会主催の「元気いっぱい！夏休みラジオ体操」のお知らせを出して、児童生徒の多くの参加を呼びかけている。また、恒例となっている「八潮まつり」にも多くの児童生徒の参加を募っている。	B	
	SDGsに関連して、児童生徒会を中心に自治活動に取り組み、地域、保護者を巻き込んでいる。	「品川コミュニティ・スクール DAY」では、『みんなが安心安全に通える学校づくり(防災、交通安全、学校生活)』というテーマで児童生徒会と地域、保護者の方で熟議をおこない、SDGsの取組をした。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		<ul style="list-style-type: none"> ・人生100年時代を幸せに生き抜くために、生涯にわたって健康への意識を高める。 ・義務教育学校の9年間の活動を見通して、計画的に、児童生徒が体力づくりに取り組めるようにする。 ・保健・安全について、望ましい習慣と知識技能を身に付けさせる。 ・運動の機会を自らづくり、健康状態を自覚し、調整できるように指導する。 		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	東京都運動能力テストにおいて、東京都教育委員会が示す、各種目の具体的目標値をすべての学年で上回る。	全学年を通して東京都の数値を下回っている傾向が見られる。今後実施の前に準備の時間をとったり意識を高めるような活動が必要であると学校保健委員会で話が挙がった。	C	運動能力テストの結果を分析して、課題解決に向かうための工夫を続けていく。体力増進は、生涯にわたって健康への意識を高める上ではとても重要なことである。区の進める「品川スポーツトライアル」「ワンミニッツエクササイズ」の内容は体力増進を考える上で、非常に効果的である。生涯教育の一環としても家庭とも連携をしながら進めていく。
	「品川スポーツトライアル」「ワンミニッツエクササイズ」に年間を通して、継続して取り組んでいる。	「品川スポーツトライアル」「ワンミニッツエクササイズ」は年間を通して、継続して取り組んでいる。運動能力テストの結果で伸び悩んでいる種目を「品川スポーツトライアル」で選び、強化している。	B	
	運動会や長縄大会、体育の授業を通して、運動に親しむための取組を行っている	短縄跳びや長縄跳びの指導を行い、運動に親しむことを目標に掲げたため、児童生徒が意欲的に取り組んだ。また、テクニカルアドバイザーによる指導の工夫でも運動に親しむ取組ができた。	B	
②	児童生徒は、自らの健康に関心をもち、歯科のう歯保有率を前期課程8%以下、後期課程9%以下にする。	う歯保有率は、前期課程では、9%、後期課程では8パーセントであった。秋の歯科検診、独自の「保護者向け歯の調査」を通して、う歯の早期発見、治療に努めている。	B	病気の実態が見えない「生活習慣病」などを理解させるために、発達段階に応じた保健指導を実施して、「自分の体は、自分で気を付けて大切にしていける必要がある」とする実感がもてる経験を今後も積ませていく。歯と口の健康づくりを今後も継続し、検診結果をもとに、発達段階に応じた内容に取り組んでいく。 学校保健委員会においては、以下の3点について、体育委員会、給食委員会、保健委員会の代表児童生徒、保護者を交えた情報交換の場として今後も継続していく。 ①課題提示 ②取組経過報告 ③実践報告と評価
	保健委員会、給食委員会の意識を高めて、給食後の歯磨きタイムの充実を図っている。	給食後の歯磨きタイムに歯磨きの習慣が付くように、全校児童、生徒への働きかけや保健だよりによる啓発を継続しておこなっている。	B	
	児童生徒の健康状態を把握し、学校保健委員会を行って校医の意見をもとに、教育課程に反映している。	児童生徒の健康状況は、養護教諭を中心に把握に努めている。学校保健委員会において校医へ必要に応じた指示を仰ぎ、適切な指導を行っている。学校保健委員会や保護者会、「ほけんだより」などをおとして、情報提供や情報共有をする機会を増やし、学校と保護者が連携を深めていく必要がある。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		・いじめや不登校などの問題では、早期発見と早期対応に心がけるとともに保護者や関係諸機関とも連携を深め、粘り強い指導を実践する。 ・いじめや暴力を許さない学校の体制を築く。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	「どんな理由があってもいじめは許されない」と考える児童生徒を100%にする。	学級、学年だけではなく、学校全体で組織的にいじめ問題に対して指導したり、気になる場合に対応したりすることができている。小さなことも見逃さず、連携して対応している。	B	「いじめ」が疑われる事案が発生した場合は、生活指導部を中心に組織的に早急な対応を行う。具体的な方策を「見える化」し、保護者に周知する。日頃の学校と保護者との信頼関係構築を十分に行い、何でも話せる雰囲気づくりに努める。また、校区教育協働委員会や地域とも連携を密にして、適切な方策が取れるような環境づくりにも力を入れる。 「いじめ防止基本方針」をホームページに掲載して、保護者、地域など多くの方に本校の方針をお知らせしている。
	いじめ防止推進法に基づき対処し、週1回の情報交換のためのブロック連絡会を行い、情報共有を図り、組織的な対応をする。	各ブロック連絡会を週1回開催し、児童生徒一人一人の状況をきめ細かく把握し、生活指導主任を中心に適切な指導方法を考えた上で、児童生徒へアプローチを行っている。	A	
	品川教育の日、校区教育協働委員会、地域健全育成運営協議会等を通して、PTAや、地域、関係諸機関と連携を深め、いじめ防止に取り組んでいる。	本校区教育協働委員会をはじめとして、地域との連携を密接にして、いじめ防止については情報共有のみならず、適切な改善策を打ち出している。特に、品川教育の日では、校区教育協働委員と教職員がいじめ防止の取組などについて話し合うことができた。また、必要に応じて、PTAへも周知し、地域全体で本学園の児童生徒の有意義な学校生活の保障をするために協働している。	B	
	いじめDアンケート等の結果の分析に基づき、児童・生徒一人一人を観察して個人的な指導、いじめが起これにくい集団づくりに取り組んでいる。	日々のデイケン、年3回のいじめDアンケートを通して、児童生徒一人一人の状況を細かく把握している。人権感覚、人権を守った行動がいじめ防止につながることを意識するように指導を継続している。また、タブレット使用に関わるマナーや使い方等の情報モラルやリテラシーについても繰り返し指導している。	B	
②	アンケート等で学校生活に課題を抱えていると答えた児童生徒に対し、その理由を聞き取りながらいねいに寄り添った支援をしている。	アンケート結果を基に、複数の教員で児童生徒の声を聴く機会を増やして不安や相談に早期に対応できるようにしている。児童生徒の様子を学年・学校全体で見ている、支援する意識をこれからも継続する。	B	今後もアンケートの分析、スクールカウンセラーとの連携などを通して、児童生徒一人一人の状況を細かく把握していく。 「たてわり班活動」を継続して、児童生徒の心に「思いやり」の心をもたせ、自尊感情、「自分を大切に思える気持ち」の育成に力を入れる。
	異学年でのお世話活動を通して、校内での居場所づくりを進め、自己有用感を高めるために取り組んでいる。	2か月に1回の「たてわり班活動」とおして、異学年交流活動を行っている。また、学校行事でも異学年を意図的に実施し、自己有用感を高める取組をしている。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 (特色ある教育活動に関すること)

重点目標		<ul style="list-style-type: none"> ・「夢と力を育む八潮学園」を標榜し、具現化するため、「夢プロジェクト」を行う。 ・八潮地区唯一の学校として、すこやか園、東京都立産業技術高等専門学校と連携し、家庭と地域と共に歩む学校を目指す。 ・学校DX(デジタルトランスフォーメーション)を進め、児童生徒、教職員が生き生きと活動する学校を目指す。 		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	夢プロジェクトとして紹介した取組に10%の生徒が応募、参加する。	夢プロジェクトの取組は、夏季休業中に希望者を募るスタイルにしたが、生徒も部活動などそれぞれの予定があり、10%までの参加率はなかった。	C	「夢プロジェクト」の取組から「多様性理解・多文化共生」事業へ転換する。 本事業の様々な多様な人たちとの触れ合いをとおして、「共生社会の実現」に向けた取組を行う。異なる文化や多様な価値観を理解し、尊重する力を育むことを目標としていく。 また、これらの取組を通して、児童生徒が自分の価値を認識して、自己肯定感を高め、自信をもって社会を生きていく力の育成も目指していく。
	教職員が、夏季休業中等を活用して取り組むことができる作文、絵画、写真、動画の募集を、端末を通じて、全校児童生徒に紹介している。	教職員は、1人1台端末を通して、全校児童生徒に募集の紹介は行ったが、それほど集まらなかった。	C	
	ホッケーオリンピックの指導、ブラインドサッカー体験、ポッチャなどの活動を継続して行っている。	スポーツ振興課の元ホッケーオリンピックを招いての「ホッケー教室」(5年)、ブラインドサッカー体験(8年)で実施をした。	B	
	「ふるさと八潮」を推進し、自らの夢を育てていくため、児童生徒代表者が地域と連携して取り組んでいる。	近隣の明晴学園との児童交流、また、「八潮清掃」や「八潮まつり」などをとおして、地域との連携を行った。	B	
②	品川コミュニティ・スクールの機能を十分に生かした授業づくりを推進する。	ゲストティーチャー招聘や家庭科の学習ボランティア等、教育課程の様々な場所で、コミュニティ・スクールの機能を生かした授業づくりを推進している。	A	今後も学校地域コーディネーターを中心に外部人材の活用を計画に行い、効果的な教育活動の推進を図っていく。学校内組織における学校地域コーディネーターの位置付けを明確にし、教職員との情報共有ができる環境づくりをさらに充実させていく。
	学校地域コーディネーターと連携し、授業に外部の人材を積極的に活用している。	学校地域コーディネーターを中心として、品川未来塾や本校の特色ある教育活動において、日程調整や人員の確保に努めてもらっている。	B	
	保幼義連携として、八潮5園との連携を一層強化し、就学前の教育との連続について取り組んでいる。	8学年の職場体験の体験先の連携、近隣幼稚園、保育園の小学校体験の受け入れ、または、学習成果発表会に幼稚園、保育園の園児を呼ぶなど連携をしている。	A	
	教員が東京都立産業技術高専と連携し発達段階にあつたものづくりの実施に向けて調整を進めている。	学年の担当、学校地域コーディネーターと連携し、準備物の用意、日程調整、学習計画などを連携して進めることができた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成